

〈研究ノート〉

「D-E 理論」と翻訳における意味の等価性について ——芭蕉の「古池」の英訳を基に——

松 中 完 二

0. はじめに

翻訳作業には言語の有する問題、すなわち意味、音声、統語、文体、表現形式等といったあらゆる問題が内包され、翻訳者は適切な方法でそれらの問題を解決することを余儀無くされる。そして翻訳における最大の課題は、原語、原文の有する意味をいかにして等価な訳語、訳文の意味へと対応させ、再生させるかということである。翻訳作業においては、意味の等価な移し替えこそが根本であり生命である。文体や表現形式等の表面的な現象は、これに附随する。はじめに意味の等価な移し替えがあってこそ、それを指し示す記号の成立が期待され得るのである。敢えて言うならば、文体や表現形式、音声といった言語における諸要素は、意味の等価な移し替えを助けるための付属品にすぎない。

本稿では、意味の等価な移し替えという問題に対して、Nida の唱えた「動的対応訳理論」という観念を基盤に、文化と解釈との関連で、俳句の翻訳を通じて、意味の等価な移し替えについて考察する。

1. 翻訳の性質

翻訳とは、ある一言語を他言語に置き換えるという、言語接触に伴う人為的な言語の置換及び創出作業に他ならない。そこには翻訳する側としての言語と翻訳される側としての言語が存在する。それは、A という言語を B という言語に置き換える場合に、A は翻訳される側の言語であり、B は翻訳する側の言語ということになり、この場合、翻訳の学問的用語において、A は原語 (source language)、B は受容言語 (target language 又は receptor language) という用語で表される。

そして、本稿で扱う翻訳とは、Roman Jakobson の唱える、翻訳における Intralingual Translation (又は Rewording)、Interlingual Translation (又は Translation Proper)、Intersemiotic Translation (又は Transmutation) の三タイプのうち、二番目の Interlingual Translation を指す。Jakobson の唱えた翻訳の三タイプとは、Intralingual を母国語内の翻訳 (古典の現代語訳や方言の標準語訳等が考えられる) とし、Interlingual を母国語対外国語とし、Intersemiotic を記号間の翻訳 (モールス信号の解釈や交通信号、標識などの解釈) とする。

このことについて、Jakobson 自身、次のように述べている¹⁾。

- 1) 言語内翻訳、すなわち、言い換え rewording は、ことばの記号を同じ言語の他の記号で解釈することである。
- 2) 言語間翻訳、すなわち、本来の翻訳 translation は、言葉の記号を他の言語で解釈することである。
- 3) 記号法間翻訳 intersemiotic translation、すなわち、移し替え transmutation は、ことばの記号をことばでない記号体系の記号によって解釈することである。²⁾

我々は母語の意味概念を理解、把握するのに何ら困難を感じることはない。それは、A という言語においても B という言語においても、同等に存在する現象である。このことを、英語と日本語の場合を想定して言い換えれば、日本人が日本語を把握、理解し、それに基づいて日常の言語生活を営むことが可能であるのと同様、欧米人は英語を母国語として把握、理解し、それに基づいた日常の言語生活を営むことが可能である。

問題は、そのような異なる言語同士を接触させて、一方の言語から意味概念を抽出し、しかもその意味概念を他方の言語表現で等価な意味概念として表出する場合である。すなわちそれが翻訳の作業そのものなのであるが、一方の言語が他方の言語で再生される過程において、訳語は二言語間における様々な問題を最小限に抑制して受容言語に再生されることが望まれる。そして翻訳作業は、一言語を他言語において等価な意味概念で再生することを求められながらも、翻訳の作業それ自体がそこにある問題から半永久的に逃れられないという自己矛盾をも内包している。

そうした翻訳と意味の等価な移し替えの問題を取り扱ったのが、Nida の「動的対応訳理論」である。

2. Nida の「動的対応訳理論 (D-E 理論)」

Nida の「動的対応訳理論」(Dynamic Equivalent Theory、以下 D-E 理論と略す)は、表現形式と意味、更にそれと関わる社会、文化といった部分にまで立ち入って翻訳を理論化したものである。彼の理論は、彼自身が聖書翻訳教会の人間であったことから、その理論の主眼点は聖書翻訳における表現形式と意味との一致、すなわち“等価な翻訳”といった点に集約される。

Nida は、翻訳には三つのレベルがあると考えた。その一つは言語学に立脚するもので、与えられた文の単語と構造とを他言語の対応する単語と構造に移し替える翻訳である。二つ目はコミュニケーション理論の立場に立脚するもので、発話文の持つ意味が同一になるように他言語の文を作り出そうとするものである。三つ目は社会言語学的な立場に立つもので、ある発話文がその社会で理解され、それが与える種々の効果と同一のものを他言語においても生じさせるような翻訳文を創出するという考え方である。そして Nida が取る立場は、この第三の視点である。Nida は聖書翻訳に携わりながら、聖書の翻訳は原文の形に捉われずに、

最もうまく内容、感情等を伝えられる形で意識を行うべきであるとする。

聖書翻訳を論じる中で、Nida³⁾は、

“翻訳とは原語で表現されている内容をそれにもっとも近く自然な受容言語で再現することであり、まず意味内容の点で、次に文体の点で原語と受容言語が実質的に対応するようにする”⁴⁾

と述べ、形式の対応のために内容を犠牲にするのではなく、その逆の内容重視の対応を第一義とすると提唱している。これを Nida は“Dynamic Equivalence (動的対応訳)”と呼ぶ。この「動的対応訳」とは、沢登/升川によって、

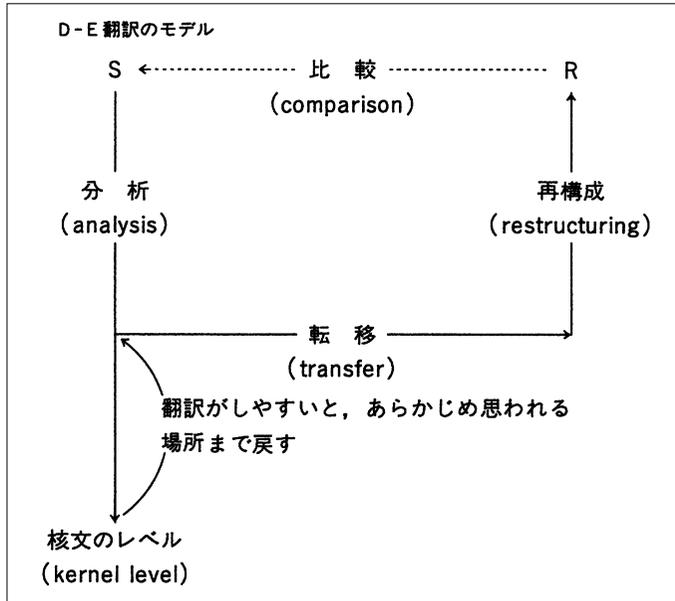
“翻訳の形式よりも内容を重視した、最も自然で最も原文に近い翻訳で、原文の読者が感じるのと、本質的に同じ感じを読者に抱かせるようにするため、縦横無尽に工夫をこらした表現”⁵⁾

と定義付けられている。これは、別の言い方をすれば、翻訳とは、発話文の持っている意味、感情、芸術性等の全てが翻訳言語の世界に完全に移されるような表現を創出することであり、これを実現させるためには、まず発話文を完全に理解し、その発話文から離れた理解の世界を一旦作り、そこから翻訳言語の世界においてその理解の世界を文章によって再構築するという考え方である。

Nida 自身は、この発話文から離れた理解の世界を「kernel level (核文)」と呼び、その理論の中で訳文の生成される過程の根幹として扱う。この考えは、言うならば、一方の文化から他方の文化への物事の考え方の変換・伝達であり、Nida のこうした姿勢は、芸術性を重んじる文芸作品の翻訳においては、極めて重要な位置を占める。

Nida の理論は、翻訳において取られる過程を三次元的に示し、翻訳をコミュニケーション過程の中に捉えた点で画期的なものであった。Nida の D-E 理論は、次頁の図のように表わされる。⁶⁾

ここでの用語と記号について説明しておく。一般に、翻訳理論では、翻訳される側の言語を「原語 (Source Language [SL])」、翻訳する側の言語を「受容言語または目標言語 (Target Language or Receptor Language [TL or RL])」と表わす。例えば、英語から日本語への翻訳の場合、英語が原語 [SL] であり、日本語が受容言語 [TR] ということになる。先の Nida の理論では S、R で表わされているが、この場合も S が原語を、R が受容言語を表わしている。またここでの「分析」とは、原語 A の表面構造を統語法、指示的意味、情緒的意味、前提、文体等の面から核文としてのレベルまで作り替える作業を指す。「核文」とは、原語 A において基底を成す意味概念や機能、及び効果を指す。「再構成」とは原語 A の伝達内容と等価な



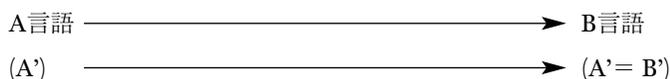
訳語、訳文を創出するために、受容言語 B の表面構造を統語法、指示的意味、情緒的意味、前提、文体等の面から、受容言語 B の核文のレベルを考察する作業を指す。「比較」とは、核文のレベルにまで分析した上で、再構成を経て出来上がった受容言語としての訳語、訳文が原語の意味概念や機能、効果を伝えるのに適当なものであるかどうか、様々な面から原語と照らし合わせて、その訳文全体の正確さや妥当性を調べる作業を指す。

原語の意味は、一旦「核文」のレベルにまで落とされ、そこで意味の解釈が行われる。そしてそれが場面や文脈、更には話者の感情といった心的様態等の要因により、原語から受容言語へと転移が行われ、最終的に再構築する段階においてどのような訳語を当て、それをどのような表現形式で再生すれば最も原語の意味内容や表現形式、更にはそこで伝えられるメッセージに肉迫するものであるかを決定するのである。

Nida の理論の功績は、翻訳の作業過程で生じる原語からも受容言語からも一種乖離した純粹な意味の理解の世界を、「核文 (kernel level)」という用語で明らかにし、そこから再構築される文が訳文であると定義付けたことである。

このことを、仮に A 言語と B 言語の二つの場合を例に考えてみる。それぞれ A 言語における意味概念を (A') とし、B 言語における意味概念を (B') としてその関係図を示せば、次のようになる。この場合、A 言語を B 言語へと翻訳する状況であると仮定する。

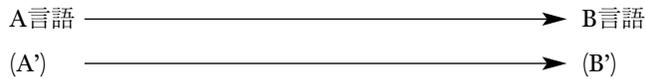
(1) 表現、意味概念が共に等価な場合



(2) 原語から言葉と意味概念を借用する場合



(3) 受容言語において言葉と意味概念を置き換える場合



Nida の理論は、(3) の場合において、その有効かつ適切な訳語を生み出すための方法を解明しようと試みたものに他ならない。こうして、形式よりも内容を優先させる Nida の翻訳理論が、実際の翻訳作業に応用されることになる。それは、Brannen が試みた山本有三の「路傍の石」⁷⁾ や、尾山令仁の訳した現代訳聖書の翻訳⁸⁾ にもその実例を見ることが出来る。尾山の聖書翻訳は、D-E 理論と、その応用の成功例と見ることが出来る。尾山自身も『聖書翻訳の歴史と現代訳』（暁書房、1989 年、57-59頁）において述べているように、従来の聖書翻訳の難解さが、補足や言い換えによって、受容言語である日本語として自然な形で受け入れられやすいものとなっている。

D-E 理論に基づいた尾山令仁の翻訳は、聖書の解釈を最大限にまでその訳文に取り入れ、受容言語である日本語の表現としてもなるべく自然な形を心がけながら、原文にはない背景知識を織り込んだ補足解釈的な訳文となっている。またそれにより、日常的な言語としても分かりやすいものとなっている。

3. 俳句の翻訳と D-E 理論

3-1. 「古池」の英訳

翻訳において、英訳の困難さが問題になるものが、俳句の翻訳である。このことについてしばしば取り上げられるのが、芭蕉の俳句とその英訳である。

ここでその例を簡単に見てみたい。

“古池や蛙飛び込む水の音”

1) An old pond

A frog jumps in

The sound of the water.

R. H. Blyth 訳

2) The ancient pond

A frog leaps in

The sound of the water.

D. Keene 訳

3) A lonely pond in age-old stillness sleeps

Apart, unstirred by sound or motion till

Suddenly into it a lithe frog leaps

Curtis Page 訳

4) A quiet pond

A frog leaps in,

The sound of the water

E. G. Seidensticker 訳

芭蕉のこの有名な俳句の英訳は、個人的なものまで含めると、六十余人により 140 余点にのぼる。そして、少なくともここに上げた英訳例に言えることは、どれも原文の持つダイナミズムや静寂感を等価に伝えられないものであるということである。細部に触れていくと、それは、まず原語の「古池」に対する訳語の選定からすでにその姿を見せる。またそうした等価な訳語の選定という問題は、最後の「水の音」に至るまで同様である。ここで、Emil Motei が行なった、この俳句の英訳における訳語の統計⁹⁾を参考に上げる。

「古」の訳		「池」の訳		「や」の訳	
old	71.0%	pond	92.5%	何も用いず	20.9%
ancient	12.1	pool	5.6	!	15.2
quiet	3.7	lake	1.9	コンマ	11.4
silent	3.7			セミコロ	10.4
mossy	3.7			ダッシュ	9.5
その他	5.8			コロ	8.5
				その他	24.1

「蛙」の訳		「飛び込む」の訳		「水の音」の訳	
frog	92.7%	jump	60.0%	sound of water /water's sound	36.2%
bullfrog	4.9	leap	20.0	splash	20.3
froglet	0.8	plunge	12.6	water's noise	6.2
batrachian	0.8	その他	7.4	その他	37.3
metonymy	0.8				

この統計は、Motei が 140 点の英訳例を対象に独自に行なったものに基づく。この句では「蛙」という名詞に対しては、その数が 1 匹か 2 匹以上かということが問題にされるが、Motei は単数が 99.18%、複数が 0.82% と算出している。また「飛び込む」という動詞については、現在形 86.3%、過去形 13.7%、動詞 99.0%、静詞 1.0% という比率も出てい

る。

3-2. 「古池」の分析

これらの訳語について、原語の持つダイナミズムという観点から、「古池」の英訳の妥当性を見ていく。

1) は、「古池」が“old pond”と訳されている。しかし、これは表面的な語を置き換えただけのものであり、この訳語から得られる心象は原語のそれとは程遠い。何故なら、“old pond”という語から喚起する心象は、「古池」という語が我々に喚起させる静寂感や風情とは正反対のものだからである。このことについて、松本道弘は、*The Japan Times* における John Haylock の書評¹⁰⁾を取り上げながら、次のように述べている。

「日本人の古池に対して抱くイメージとは違い、欧米人のそれは、黒い雑草が生い茂る嗅くてよどんだ水が溜まった場所、というネガティブなものである。静寂さや緑苔とはうって変わり、嗅さとぼうふら、というイメージに近くなる。」¹¹⁾

2) の場合は「古池」に“ancient pond”が当てられているが、これは「古代の」の意である。そのため、恐竜か何かが生息しているような、大昔の沼地に近い心象を喚起させ、原文のダイナミズムを等価に伝えるものではない。1) や 2) の“old pond”や“ancient pond”という訳語の不適切さについては、別宮貞徳¹²⁾、磯谷 孝¹³⁾、中野道雄¹⁴⁾、成瀬武史¹⁵⁾、E. G. サイデンステッカー／那須 聖¹⁶⁾らも同様の指摘をしている。

3) の場合は、原文から喚起される心象を言葉で説明するものであり、説明過剰といった感が否めない。そのため、詩的リズムという点と、余韻という部分で原文の持つような空白感が全く感じられず、多すぎる言葉が俳句本来の幽玄さを消し去ってしまっている。

4) の場合は注目に値する。「古池」を“quiet pond”と訳したのは、Nida の主張する動的対応訳理論に通じる手法である。これは原文の持つ心象を、出来るだけ等価な表現形式で移し替えたものである。勿論、形式的には「古い」に当たる英語は“old”である。しかし、この俳句に見る「古池」は、単にそうした池の新旧を述べるものではなく、その周辺感覚として喚起される古寂感を伝えるものである。そうした等価な認識の伝達という側面から見た場合、ここでは“old”よりも“quiet”が、原文をより有効に伝える訳語として選択され得るのである。それ故、字義通りの訳である“old pond”はこの場合原文の「古池」とは等価になり得ない。一方で、そうした語が伝える心象を映し出した“quiet pond”が「古池」と等価なものとして選定されるのである。こうした訳語こそが、我々が言葉の認識から喚起する概念や心象の認知構造を捉えたものである。

この俳句における「古池」という語の持つ心象を「核文」のレベルにまで落とすと、決して池の年代的な部分を問題にしているのではないことが明らかである。そこには、静寂の中

に獅子威しの音が一つ響くことで認識される幽玄や侘び寂び、もののあはれといった、自然美を通して感じられる歴史の流れの中における宇宙と自己との一体感、時間と空間の融合、そしてそれに対する陶醉と無の世界が繰り広げられるのであり、「古池」というのはそうした演出の為の道具である。それは新しい池でもただの池でもなく、「古い池」でなければならない。「古い」という概念に、そうした全ての世界が込められるのである。

芭蕉のこの句の解釈に関して、象徴主義の観点から鈴木大拙は次のように述べている。

“つまり、詩人であり先見者（あるいは^{ミステイク}神秘家）たる芭蕉にとっての古池の価値は、古池以外のなんら特定の源からではなく、まさに古池そのものから生じているのである。いや、古池が価値であるといった方がよい。古池が芭蕉にとって意味あるものとなったのは、芭蕉が古池以外のなにものかと古池がもつ関係に価値を見出したためではないのである。

[中 略]

なぜ芭蕉は「古池や」といったのだろうか。この場合、英語の「おお」に相当するこの「や」は俳句全体にとってどのような意味があるのであろうか。この接尾辞は、古池を残余の対象あるいは出来事からとり出して、それを特定の言及のポイントとする力を持っているのである。

こうして古池が言及されると、この俳句に述べられている一連の出来事ばかりではなく、人間存在の世界をつくりあげている事物の無限の総体が、そこから導き出されてくるのである。芭蕉の古池は仏教哲学の華嚴の体系における法界なのである。その古池は全宇宙を内に含み、全宇宙はその古池に確実に収められているのである。”¹⁷⁾

またそれを補足するように、磯谷 孝はこの俳句の英訳に感じられるダイナミズムの等価性の欠如の理由を、日本精神、東洋精神の欠如によるものであるという観点から、次のように述べている。

“東洋的な覚醒とは、古池なら古池、蛙なら蛙、水の音なら水の音、等々がそれぞれ古池そのもの、蛙そのもの、水の音そのものとなり、しかも、観察主体自身も同時に古池そのもの、蛙そのもの、水の音そのものとなりきる境地を言うのである。その場合、眼の前の物理的な古池、蛙、水の音が観察主体と化学変化して一つになるのではなく、古池は単に「われわれが日本のあちこちに見ることのできる普通の池ではない」、それらの池を含んだ普遍的な池であり、しかもなお、「私」がその古池となり、古池が「私」となるようなそうした古池なのである。古池が普遍的な古池である、ということは、古池において存在と意義が一つになった、あるいは存在＝意義となったことを意味している。この意識を得たときに芭蕉にとって一つの客観世界が開始、創造

され、また芭蕉自身がこの客観世界そのもの、宇宙そのものになりきるのである。”¹⁸⁾

従って、「古池」の持つダイナミズムとその解釈を最大限に原語のそれに近づけた結果、表面的な表現形式を置き換えただけの“old pond”から、内容重視の対応を試みた“quiet pond”という訳語への変容が見られ、こうした訳語の変容こそが Nida の「動的対応訳理論」の暗黙の実践に他ならない。

4. 翻訳における意味の等価性

詩歌や俳句は、音声的表現価値をその生命としているため、極めて翻訳が困難である。これについては、すでに Jakobson¹⁸⁾ が言語学における音声的問題と翻訳の側面から、次のように述べている（下線部筆者）。

“地口、あるいは、ヨリ学問的で、おそらくヨリ正確な術語で言えば、類音性 paronomasia が、詩的芸術に君臨し、その支配が絶対的なものにせよ限られたものにせよ、詩の翻訳は、定義上、不可能である。一つの詩型から他の詩型への言語内転移であれ、また、一言語から他の言語への言語間転移であれ、あるいは最後に、ことばの芸術から音楽、舞踏、映画、絵画への、一つの記号体系から他の記号体系へ記号法間転移であれ、可能なのは、ただ創造的な転移だけである。”

古くからのきまり文句“Traduttore, traditore 翻訳者(は)、反逆者”をもしかりに“the translator is a betrayer 翻訳者は裏切り者である”という英語に訳したとすると、この韻をふんだイタリア語の警句からその類音的価値をすべて奪ってしまうことになる。こうなると、われわれは認知的態度に迫られて、この格言をもっと明示的な言明に変え、どういうメッセージの翻訳者なのか、どういう価値の裏切り者なのかという発問に答えざるを得なくなるであろう。”²⁰⁾

Jakobson のこの言葉は、音階という理由からの翻訳不可能性を先見的に物語るものともなっている。ここでは俳句の翻訳をその例に上げたが、ここで問題となっていることは、意味の理解において共通の成分として働く心象を、翻訳でどこまで等価に言語形式で移し得るのかという問題である。

これまで見てきたように、翻訳作業には多くの制限が存在する。そして、言語にはそれに伴う社会的、文化的認識の枠組みが存在し、またそれに伴って意味概念や言葉の使用法において何らかの影響を受ける。もっと簡単に言えば、英語には英語の、日本語には日本語の表現に伴う特質と、それに付随する意味概念がある一方で、それらがある部分までは共有され得るものの、ある部分からはその共有が難しい現実が存在するということである。その反面、翻訳作業とは、こうした相容れない相手側の言語表現やそれに伴う意味概念を、どこまで母

語の表現や意味概念へと肉迫させられるかという作業に他ならない。その結果、語の置換や表現の置換といった手法に頼ることになり、それに伴って意味概念が母語のそれへと転移していくという現象が往々にして見られることになる。

ただし、こうした意味概念の移行は、それが有効に活かされる場合と、原意に対する侵害にまで発展する場合とがあり、どこにその境界線を引くかは、翻訳を行なう人間に無意識のうちに一任されてしまっている。こうした翻訳に伴う要求や、それに応える技法の一つ一つが、翻訳における転移という過程に他ならず、全ての訳語はこの転移を経ることではしか生成され得ない。そしてそうした翻訳作業を難しくしている原因の一つが、等価な意味の移し替えという、翻訳作業の最初から最後まで無意識に要求される課題のためである。すなわち、等価な意味とは一体何であるかという問題である。意味とは極めて漠然とした人間の概念世界での現象であり、それは我々の心内に存在しながらも、言語を媒介として相手に伝えられ、外の世界に現出する実体の捉え難いものである。翻訳とは、こうした意味の問題に、他のどの学問分野よりも強く直面する実際的な問題を自ずから内包しているのである。

そして意味を伝達する言葉自体も、極めて抽象的な手段にすぎない。言葉は具体的な事象や事物のみならず、人間が心内において有している広範かつ抽象的な心象をも伝える道具である。また語彙も同様に、具体的な事象や事物を示していると同時に、そうした抽象的な心象を表わしている。

5. むすび

人間が言葉を理解するという現象は、言葉が表わしている対象に関する知識によって形成され、相手が持っている知識と自分自身が持っている知識、更にはその言葉が指し示す現実世界での対象物との知識を対応させることで成立するものである。また人間は、言葉やそれが表わしている具体的な対象物で直接そのものの意味を理解しているのではなく、概念という抽象的な媒体を通して理解を促進している側面も多い。

これまで問題となったのは常に一つのことである。すなわちそれは、原語、原文の持つ意味概念に対して、何をもって等価な訳語、訳文とするかという目に見えない基準とその解決法としての訳語のあり方についてである。その例として、「古池」の英訳に見る訳語の変容の妥当性を問い、その足場として Nida の D-E 理論に解答を求めた。

翻訳に伴うこうした問題について、柳父 章は清水幾太郎の言葉を引用しながら、“society” の訳語の例を上げて、次のように語っている。

“しかし、society の翻訳語として、「世の中」を宛てるか、「社会」を宛てるか、は重要な違いである、と私は考える。西欧語における society という言葉の意味と、日本語における「世間」や「世の中」という言葉の意味とは、決して同じではない。society の概念と、「世間」や「世の中」の概念とが違うのである。他方、「社会」とい

う言葉は、「世間」や「世の中」とは同じではない。「社会」は書き言葉であり、事改まったときの言葉である。改まった口調で語り得ることしか語り得ない。「世間」や「世の中」は、口語の言葉、日常語である。「世間」や「世の中」には、豊かな語感があり、その言葉使いには、現実の生きた事象の裏打ちが伴っている。「社会」と、「世間」や「世の中」との違いは、本質的に、難しい言葉とやさしい言葉との違いではない。それは、作られた言葉と、歴史の中に生きてきた言葉との違いである。

そして、「社会」と *society* ともまた、同じ言葉ではない。翻訳語とその原語との関係は、やはり作られた言葉と、歴史の中に生きてきた言葉との違いである。作られた言葉「社会」は、歴史の中に生きてきた言葉 *society* によって語られる内容を、遂に伝え得ないのである。もちろん、「社会」は *society* の翻訳語として意識的に作られた言葉であるから、意味の共通するところも多い。が、言葉は、結局それを作り出した人の意図の通りに働くものではない。”²¹⁾

ここでは、柳父自身は「作られた言葉」と「歴史の中に生きてきた言葉」という表現を用いて、翻訳の受容言語側における毀傷について述べているが、「歴史の中に生きてきた言葉」とは、「生活の中に密着した言葉」である。そして、翻訳の受容言語側における文化的、社会的枠組みの中であって、そこでの生活の中に密着した「歴史の中に生きてきた言葉」で翻訳を成立させる必要性は、翻訳の受容言語側において毀傷をきたさないものとするという意向を尊重する態度に他ならないためである。

また最所フミは、柳父の言う「歴史の中に生きてきた言葉」という概念を「庶民語」として捉え、次の様に述べている。

“庶民語というものは、通常翻訳不可能なものである。どうしてもかんじんのところがはっきり英語では伝わらないという日本語の数は、日本語では伝わらない英語の数よりも、多くとも少なくはないはずである。言うまでもなく、それは国民性の違いを物語っている。適訳がないままに、言葉の違いをはっきり認識することがそれ自身コミュニケーションにつながるものであって、むりやりに日本語を英語の容器に押しこめようとするところに、永久に消えてなくなる誤解がつづくのである。”²²⁾

更に、同様の問題について三宅 鴻は次の様に述べる。

“受験生レベルでは、たとえば不加算用法の *treaty* は、「交渉・折衝・協議など」のどれで訳しても百点をつけるべきであるが、この三語はだいたい意味を異にし、どれを選ぶかはコンテキストで判断するほかはない。「交渉」というのは相手とわたり合うことを指し、「協議」というのは協調的に一所に考えることを指すからである。英

語としてはその双方を指すのであるが、日本語にするときは一つに限定されるのは、翻訳の宿命である。

この宿命が、翻訳というものを一つの冒険にする。訳者は、一つの訳語の選択に、極端に言えば全責任をかけなければならない。ある場合にはそれは、スタイルの選択である。Silence を「しじま」と訳するか「寂靜^{じやくじよう}」とするか「静寂」とするか「静けさ」とするか「しずかさ」とするかで、余のことはすべて違ってくる。上田 敏が hillside に「片岡」という訳語を思いついたとき、彼の訳のスタイルはきまっていたであろう。”²³⁾

これらの言葉は、訳語生成にかかる心象の言語表現への写像という問題を如実に物語ったものである。そのため、一言語において、共通の心情や意味概念といったものをその根幹に共有することでより有効に機能する言葉や表現法が、文化的、社会的枠組みが様々な点で異なりを呈することで他言語では受け入れられ難く、また原意と等価な意味概念や機能、効果といったものを表わし難い場合が多い。加えて、このような事実直面せざるを得ない作業が翻訳そのものである。

Murray²⁴⁾はこのことを次の様に語っている。

“翻訳を通じて外国の偉大な作品を理解しうるのは、当の二つの国語が共通の観念体系をもって働き、同一段階の文明に属している場合である。ところが、古代ギリシアと現代イギリスの間には、人類史の巨大な深淵が口を開けている。その間にはヨーロッパ共通の宗教の成立があり、また部分的にはその蹉跌がある。蛮族の侵入があり、封建体制がある。近代ヨーロッパの再編成、発明の時代、産業革命がある。フランス語、もしくはドイツ語で書かれた哲学の本では、まづその各項のほとんどすべての名詞を、まさしくそれに該当する英語に直訳しうる。が、ギリシア語となると、そうはいかない。「詩学」の冒頭数頁の間に現れる名詞は、英語のうちにその該当語を十分の一も見出しがたい。一つ一つの命題は一度思考の最低基盤にまで引降され、そのうえで再構成されなければならぬのである。”²⁵⁾

この指摘は、日本語と英語の翻訳事情にもそのまま通じるものである。また、言葉が共通の観念体系を持っているという点ではどうであろうか。これまで見てきた「古池」の英訳の例は、観念体系が共通のものとして交錯しない場合であったが、そのような場合の翻訳において、共通の意味概念の創出という問題とその解決法であるが、多くの場合、言葉や表現を翻訳の受容言語側において受け入れられやすい形へと巧みに置き換えることで、その解決法として当てられた。翻訳の受容言語側において受け入れられやすい形とは、柳父の言う「歴史の中に生きてきた言葉」であり、私流に言えば「文化的、社会的枠組みの中であって、そ

こでの生活に密着した言葉」ということになる。何故なら、我々は言語によってその意味概念を摂取し、それによってコミュニケーションを形成しているからである。そこにあつて、意味概念の伴い難い言葉を不自然な形のままで使用しても、それは到底母国語として一言語のもつ領域へと溶け込んでいかなければならず、翻訳の受容言語側にとっての毀傷とも言えるものとなるのである。そのため、翻訳の成立基盤を確固たるものとするためには、一度原文における意味概念や機能、及び効果といったものを分析することで、その上に立って原意と肉迫した意味概念や機能、及び効果といったものを有する翻訳の受容言語へと、言葉または表現を再構築する必要があつた。

そしてこのことは、Murray の言う、「一つ一つの命題は一度思考の最低基盤にまで引降され、そのうえで再構成されなければならぬ」という言葉で表わされると同時に、この言葉こそが翻訳における性質を全て物語っているのであり、その実践こそが Nida の唱える D-E 理論に他ならない。

注

- 1 Jakobson, Roman. 1963. *Essais de Linguistique Générale*. Paris: Editions de Minuit. 79.

原文は以下の通りである。

- “1) La traduction intralinguale ou reformulation (rewording) consiste en l’interpretation des signes linguistiques au moyen d’autres signes de la meme langue.
- 2) La traduction interlinguale ou traduction proprement dite consiste en l’interpretation des signes linguistiques au moyen d’une autre langue.
- 3) La traduction intersemiotique ou transmutation consiste en l’interpretation des signes linguistiques au moyen de systemes de signes non linguistiques.”

- 2 川本茂雄監修. 1973. 『一般言語学』みすず書房. 57-58 頁.

- 3 Nida, Eugene./Taber, Charles./Brannen, Noah. 1969. *The Theory and Practice of Translation*. Leiden: Published for the United Bible Societies by E. J. Brill. 12.

原文は以下の通りである。

“Translation consists in reproducing in the receptor language the closest natural equivalent of the source-language message, first in terms of meaning and secondly in terms of style.”

- 4 沢登春仁/升川 潔訳. 1973. 『翻訳—理論と実際』研究社. 14 頁.

- 5 沢登春仁/升川 潔訳. 1973. 『翻訳—理論と実際』研究社. 218 頁.

- 6 この模式図の初出は、Nida, Eugene./Taber, Charles./Brannen, Noah. 1969. *The Theory and Practice of Translation*. Leiden: Published for the United Bible Societies by E. J. Brill. 33. であるが、そこではまだ核文や再構成といった具体的示唆は見られず、あくまで翻訳の過程を抽象的に示したものであり、この模式図は Brannen, Noah./沢登春仁. 1988. 『機能的翻訳のすすめ』バベル・プレス. 161. においてより具体的に展開される。従って、本稿で用いた模式図も Brannen, Noah./沢登春仁. 1988. 『機能的翻訳のすすめ』バベル・プレス. 161 頁からの引用である。

- 7 沢登春仁/升川 潔訳. 1973. 『翻訳—理論と実際』研究社. 39-40 頁.

- 8 尾山礼仁. 1989. 『聖書翻訳の歴史と現代訳』暁書房.

9 佐藤紘彰. 1987. 『英語俳句：ある詩形の広がり』サイマル出版会. 248-249 頁.

10 *The Japan Times*, Saturday, June 11, 1983. 10.

原文は以下の通りである。

“‘Old pond’ in English might suggest a stinking body of water, black, weedy and stagnant, while furuike brings to a Japanese mind a picture of an attractive stretch of water surrounded by moss-covered stones, fine trees, and green rushes and so on.”

11 松本道弘. 1984. 『英語アレルギーの治し方』朝日イブニングニュース社. 87-88 頁.

12 別宮貞徳. 1975. 『翻訳を学ぶ』八潮出版社. pp. 81-83 頁.

13 磯谷 孝. 1980. 『翻訳と文化の記号論 文化落差のコミュニケーション』勁草書房. 56-59 頁.

14 中野道雄. 1994. 『翻訳を考える』三省堂. 219-228 頁.

15 成瀬武史. 1978. 『翻訳の諸相—理論と実際—』開文社出版. 209-211 頁.

16 E. G. サイデンステッカー／那須 聖. 1962. 『日本語らしい表現から英語らしい表現へ』培風館. 210-211 頁.

17 鈴木大拙. 1967. 「仏教における象徴主義」マクルーハン／大前正臣・後藤和彦訳. 1967. 『マクルーハン理論』サイマル出版会. 232-234 頁.

18 磯谷 孝. 1980. 『翻訳と文化の記号論 文化落差のコミュニケーション』勁草書房. 57-58 頁.

19 Jakobson, Roman. 1963. *Essais de Linguistique Générale*. Paris: Editions de Minuit. 86 頁.

原文は以下の通りである。

“Le jeu de mot, ou, pour employer un terme plus érudit et à ce qu’il me semble plus précis, la paronomase, règne sur l’art poétique; que cette domination soit absolue ou limitée, la poésie, par définition, est intraduisible. Seule est possible la transposition créatrice: transposition à l’intérieur d’une langue — d’une forme poétique à une autre —, transposition d’une langue à une autre, ou, finalement transposition intersémiotique — d’un système de signes à un autre, par exemple de l’art du langage à la musique, à la danse, au cinéma ou à la peinture.

S’il nous fallait traduire en français la formule traditionnelle Traduttore, traditore par «le traducteur est un traître», nous priverions l’épigramme italienne de sa vasleur paronomastique. D’où une attitude cognitive qui nous obligerait à changer cet aphorisme en une proposition plus explicite, et à répondre aux questions: traducteur de quels messages? traître à quelles valeurs?”

20 川本茂雄監修. 1973. 『一般言語学』みすず書房. 64 頁.

21 柳父 章. 1972. 『翻訳語の論理』法政大学出版局. 22-23 頁.

22 最所フミ. 1975. 『英語と日本語 発想と表現の比較』研究社出版. 174 頁.

23 三宅 鴻. 1972. 「翻訳論覚え書—語学者の夢想—」『月刊言語 特集：翻訳をめぐる』1972 年 7 月号、大修館書店. 6 頁.

24 Murray, G. 1909. *Aristotle on the Art of Poetry*. Oxford: Clarendon Press. 5-6.

原文は以下の通りである。

“To understand a great foreign book by means of a translation is possible enough where the two languages concerned operate with a common stock of ideas, and belong to the same period of civilization. But between ancient Greece and modern England there yawn immense gulfs of human history; the establishment and the partial failure of a common European religion, the barbarian

invasions, the feudal system, the regrouping of modern Europe, the age of mechanical invention, and the industrial revolution. In an average page of French or German philosophy nearly all the nouns can be translated directly into exact equivalents in English; but in Greek that is not so. Scarcely one in ten of the nouns on the first few pages on the Poetics has an exact English equivalent. Every proposition has to be reduced to its lowest terms of thought and then re-built.”

25 福田恒存. 1987. 『福田恒存全集 第五卷』文芸春秋. 32 頁.